

宗教家フランクリンと彼の大いなる野望

竹腰 佳誉子

Benjamin Franklin and His Great Ambition

Kayoko TAKEGOSHI

キーワード：ベンジャミン・フランクリン，ジョージ・ホイットフィールド，出版文化，福音主義キリスト教
keywords：Benjamin Franklin, George Whitefield, Print Culture, Evangelicalism

I はじめに

建国の父祖として知られている Benjamin Franklin は、政治家、科学者、印刷業者、教育家などの様々な肩書き、および側面を持っていることは誰もが認める事実である。そこに宗教家としてのフランクリンをクローズアップし、彼の宗教的信念を固定化、限定化することは難しいと言えるだろう。そのことを示すように John Adams はフランクリンについて “The Catholics thought him almost a Catholic. The Church of England claimed him as one of them. The Presbyterians thought him half a Presbyterian, and the Friends believed him a wet Quaker.” (246-47) と述べ、彼の宗教に対する曖昧な態度について多少の皮肉を込めて述べている。Kerry S. Walters は、フランクリンの宗教に対する寛容さを指摘し¹、また Barbara B. Oberg と Harry S. Stout が編集した著書のように、これまで対照的に見られてきた Jonathan Edwards とフランクリンの相違点よりむしろ類似点に焦点を当てて論じているものもある。

ここで明らかにしようとしていることは、フランクリンに宗教家的側面があったのかどうか、もしあったとすればそれはどのような信仰の態度であったのか、ということではない。印刷業に身を投じた頃からあらゆるペンネームを使い分け、様々なキャラクターを演じてきたイメージ戦略の達人ともいえるフランクリンに、そのような問いかけをすることは、ある意味愚問のように思われる。読者を楽しませ欺きながら自己を演出し、ひいては新生アメリカ共和国をヨーロッパに向けてアピールするエンターテイナーであるフランクリンの言葉の裏には、常に様々

な仕掛けが見え隠れしているからである。

本論ではむしろ啓蒙主義的あるいはプラグマティックな部分ばかりが強調されているフランクリンが宗教的側面も併せ持つこと、あるいは併せ持っているであろうと見なされていることそれ自体の意味するところを、当時の社会情勢、宗教事情やフランクリンが従事した印刷業、出版文化、そして George Whitefield との関係などから読み解くことを目指したいと思う。

II 『自伝』/テキストとしての自己と新生体験

まずフランクリンが宗教的側面を併せ持つと考えられうると述べるに足る彼の信仰に対する態度について『自伝』(*The Autobiography*) を中心に検証していく。

フランクリンは、いわゆるピューリタンの教会契約においては「半途契約」の会員とされている敬虔な両親に育てられている。父親である Josiah Franklin の “intending to devote me as the Tithe of his Sons to the service of the Church” (1313) という信念に基づいて、フランクリンは、八歳の時牧師になるために必須であるラテン語学校に通わされることになる。しかし “from a View of the Expence of a College Education which, having so large a Family, he could not well afford, and the mean Living many so educated were afterwards able to obtain” (1313) という父の考えによってフランクリンは、ラテン語学校を一年も満たないうちに辞め、彼の牧師への道は九歳という時点で、いとも簡単に閉ざされてしまう。もっとも当時フランクリン自身が牧師の道に進みたいと思ってい

たとは考えにくい。

というのもフランクリンの牧師に対する不満は、比較的早い時期にピューリタニズムとの決別宣言とも取れる形で表されている。兄 James の印刷所で徒弟として年季奉公をしていた十五歳の時、兄の発行する『ニューイングランド新報』(*The New-England Courant*)に“Silence Dogood”のペンネームで、彼は牧師養成システムについての記事を書いている。記事の中でフランクリンは、当時の学校が牧師養成の機能しか果たしていないこと、学校への入学者が裕福な家の子弟に限られていること、そこでの教育が全く実用的なものではなく、さらに悪いことに、ただプライドだけが高い、鼻持ちならない人間を育む結果となっていることに対して痛烈に非難している。『自伝』において、十五歳というこの時期にフランクリンは、理神論者となったことや勉強時間を得るために日曜日の礼拝にはできるだけ行かないようにしていたことも述べている。この習慣は長年にわたって続いている。これらの事実、彼の宗教への熱意の薄さ、あるいは信仰心の欠如として捉えることも可能だろう。しかしながら、『自伝』のなかで読者は、彼の信仰心と呼べるものに頻繁に出会うことになる。また理神論について言えばフランクリンは、かつての自分の立場に対して“this Doctrine tho' it might be true, was not very useful” (1359) とその有効性への疑問を『自伝』のなかで示している。

フランクリンは『自伝』を次のような神への感謝の言葉で始めている。

And now I speak of thanking God, I desire with all Humility to acknowledge, that I owe the mention'd Happiness of my past Life to his kind Providence, which led me to the Means I us'd & gave them Success. — My Belief of This, induces me to *hope*, tho' I must not *presume*, that the same Goodness will still be exercis'd towards me in continuing that Happiness, or in enabling me to bear a fatal Reverso, which I may experience as others have done, the Complexion of my future Fortune being known to him only: and in whose Power it is to bless to us

even our Afflictions. (1308)

このようにフランクリンは、『自伝』のなかで自らの立身出世の過程を述べるにあたり、言い換えると『自伝』という立身出世のハウツー本を執筆するにあたって、これまでのサクセスストーリーが神のみ恵みのおかげであることを述べている。実際『自伝』においてフランクリンは、いくつかのトラブルに巻き込まれる危険があったにもかかわらず、クエーカーの信徒によってあやうく難を逃れた経験を語っている。

一つ目のエピソードは次のようなものである。十八歳の時フランクリンがニューヨーク行きの船内で出会ったクエーカー教徒の女性が、フランクリンが同船していた一組の女性と親しげになっていく様を見て、彼女たちにあまり近づかないほうがよいという忠告をする。フランクリンは、彼女の忠告を守るが、後になってその一組の女性たちは、実は売春婦であり窃盗を繰り返していたという事実が明らかになるといふものである。

もう一つのエピソードは、やはり十八歳のフランクリンが1年半滞在することになるロンドンへ向う船内で出会ったクエーカー教徒である Thomas Denham のおかげで、自分が資金を調達するといつて、彼に印刷業を営むことを熱心に勧めた当時の Pennsylvania の知事 William Keith がいかに口先だけの男で信用できない人物であるかを知ることになる。さらに Philadelphia に戻ってきてからもデナムの下でしばらく働き、学ぶ機会を得ただけではなく、わずかばかりではあるものの彼の遺産を手にしたといふものである。

これらはフランクリンにとって単に敬虔なクエーカー教徒を介して神によって救われた体験を意味するだけではなく、ピューリタニズムの教義である回心体験、あるいはジョージ・ホイットフィールドが新生体験と呼んでいるものと見なすことも可能であろう。この二つの経験を先に立って、フランクリンは、父親にすでに忠告、警告を受けている。父親は、フランクリンのような非常に若い青年に、印刷業の独立そして開業を勧めるとは、キースはきつと分別が足りない人物に違いないであろうから、彼の言葉は信用ができないということを忠告する。さらにそのようない話にすぐに飛びつくのではなく、勤勉に働き分別して節約すれば、印刷業を開業できるようになるだろうから、その際には資金的な

援助をすることをフランクリンに約束している。この父の言葉に全く耳を貸そうとしなかった当時の自らの愚かさ、不信仰といえる行いを『自伝』で明らかにするという行為は、十分にフランクリンの回心告白、新生告白といえるものだろう。そもそもフランクリンは、二十二歳で印刷会社を経営し始めたときに書いた墓碑銘において、テキストとしての自己の人生が今後“the Author” (91) によって幾度も校正され、訂正されることによって完璧なテキスト、つまり完璧な人生に変えることが可能であるということを示している²。してみれば、印刷業者であるフランクリンにとって、自らの著書の版を重ねることがそのまま新生体験と言えよう。『自伝』のなかでフランクリンは、ホイットフィールドは彼が改宗しないことを嘆いていたと述べているが、実際はホイットフィールドの望み通りになっていたわけである。また William Breitenbach は、先に述べた二つめのエピソードを、フランクリンの再生の機会であると述べている (19)。この体験の後フランクリンは、敬虔な父の教えに従い、勤勉、節約に励むことによって、神の目に見える形で徳の研鑽に励む。まさにここからフランクリンの成功への道がスタートすることになる。

それは、フランクリンがかつて使用していたペンネームである“Silence Dogood”の由来として従来考えられている Cotton Mather の『善行録』(Bonifacius, 1710) で述べられていることを我々に思い出させる。マザーは、増井が述べているように「元来ピューリタニズムに内在する敬虔主義を個人の信仰体験から、より具体的な社会的貢献へと結実させる実践的な方法」(151) を提案しようとしたのだ。結果的にマザーは、十分な方法を見出すことは出来なかったが、フランクリンは自らの新生告白とその後の成功へのプロセスの両方を描いている『自伝』あるいは「富に至る道」(“The Way to Wealth,” 1758) によって、自らの理想とする、つまり勤勉、節約を美德とする道へ着実に読者を導いていったのである。それはひとつの宗教と呼べるものだったはずである。

III 教義の普及とその方法

『自伝』の十三の徳目樹立のパートには、まさに先に示した信仰体験を社会貢献に結実させるために

必須とされる基本精神が描かれている。十三の徳目の樹立は、フランクリン自身が“the bold and arduous Project of arriving at moral Perfection” (1383) と呼んでいるものである。

フランクリンは、自らが習得した十三の徳目こそが現在の自分、つまり数々の名声を得、最も有名なアメリカ人を形成した原動力となっていることを告白している。しかし彼は、ここでも神のみ恵の力について記述することを忘れてはいない。十三の徳目習得用の手帳には、題句として次のような言葉が書かれてある。

*Here will I hold: If there is a Pow'r above us,
(And that there is, all Nature cries aloud
Thro' all her Works) he must delight in Virtue,
And that which he delights in must be happy.*
(1388)

さらにフランクリンは、上記と同じような内容の祈禱文を毎日唱えている。このようにフランクリンは、常に神の力を借りながら、神のみ恵を増すべく自己の研鑽に努めたのである。フランクリンは、自分の上にいる神の存在を常に意識し、彼が信じて疑うことの無かった実利に直結した教義というものは、神の目にも明らかな形でもってこの世で積んだ徳を示すことができるような教義である。

十三の徳目を習得したフランクリンは、出版することなく終わった「徳に至る道」を教典として用い、宗教団体のようなものを設立することを思い描いていたと考えられる。フランクリンが“a great & extensive Project” (1395) と呼んでいるこの宗教団体設立計画は実現されることはなかったものの、フランクリンはこの宗教の信仰箇条と言えるものを次のような言葉で表している。

“That there is one God who made all things.
“That he governs the World by his Providence. —

“That he ought to be worshipped by Adoration, Prayer & Thanksgiving.

“But that the most acceptable Service of God is doing Good to Man.

“That the Soul is immortal.

“And that God will certainly reward Virtue

and punish Vice either here or hereafter.” – (1396)

フランクリンが“one purporting to be the Substance of an intended Creed, containing as I thought the Essentials of every known Religion, and being free of every thing that might shock the Professors of any Religion” (1396) と呼んだ上記の信条簡条は、先に述べた題句と共通するものである。これこそがフランクリンの推し進めようとしていた宗教の基本精神であり、フランクリンの目指したことはこの教義が広く一般の人々にまで浸透し、それによって“a great Number of good Citizens” (1397) を作り上げることだったと思われる。しかしながら結果的には宗教団体設立には至っていない。なぜならばフランクリンにとって宗教団体設立は必ずしも必要なものではなかったのであり、印刷出版業界で活躍するビジネスマンあるいはジャーナリストであった彼にはもっと簡単でしかも有効な手段が分かっていたからだろう。

フランクリンの『自伝』は、1794年から1828年にかけて二十二版も重版され、1798年以降は、「貧しいリチャードの暦」(“Poor Richard’s Almanack”) からの抜粋、特に「富に至る道」が本編の『自伝』に加えられている。独立初期の頃には、『自伝』はアメリカにおいてどこでも手に入るという状態であり、また十九世紀の学校では『自伝』を教科書としても使用され始め、聖書と同じくらいよく知られた書物となっていた (Wood, 3)。このようなフランクリンの『自伝』、つまり彼の教えの広がり、彼の想像をこえるものであったかもしれない。フランクリンは、宗教団体を設立することなく、暦や新聞の発行によって多くの読者、言い換えるならば多くの信者を獲得することに成功したのである。そして彼の教えは彼が意図するしないにかかわらず、広く人々に浸透する結果になったといえるだろう。やがて彼の教えは、時を越えて伝えられることになるのだ。

IV 印刷出版ネットワークと福音主義 キリスト教ネットワーク

フランクリンの人生の基盤になっているのは、彼の教えを一気に広めることを可能にした印刷業であ

る。フランクリンと印刷業、そして独立革命の関係性についてはすでに「植民地における二つの大革命—フランクリンと印刷業」と題する論文において論じており、その内容をここで詳細に述べることは避けたいと思うが内容はおおよそ次のようになる。フランクリンは、神権政治の維持装置としての役割を果たしていた印刷業を、経済という枠組みの中で機能させると同時に、活字のもつジャーナリズム性を開花させることでプリント・レヴォリューションを引き起こした。そしてそれと並行する形でアメリカン・レヴォリューションが起きており、この時期の新聞の発行数の急激な増加は、植民地に暮らす人々の間にコミュニティ意識を共有させることに大きく貢献した。このようにして二つの革命が互いに互いを刺激しあいながら革命を推し進めていったというものである。

フランクリンの登場によって印刷業は、神権政治のヒエラルキーを覆すことになる。しかし植民地に印刷機が登場した1600年代から印刷業者の主な顧客は、教会、牧師、州であり、フランクリンが活躍する1700年代になっても教会、牧師は変わらず重要な大口顧客だった。実際フランクリンの場合も、彼がペンシルヴァニアにおいて印刷業を軌道に乗せるきっかけになったのは、William Sewel の『クエーカー教徒の歴史』(*History of the Quakers*) のパンフレット500部の印刷を古参の印刷業者である Andrew Bradford から奪取したことに起因している。またペンシルヴァニアにホイットフィールドが巡回宣伝活動にやってきたとき、フランクリンは、他に先駆けて彼を新聞で取り上げただけでなく、彼の『説教集』や『日記』の200部以上におよぶ印刷を積極的に請け負っている (Whitefield, 360)。してみれば、フランクリンと印刷業、そして宗教は以前と変わらず強固な関係でもって結ばれていたと考えられるかもしれない。しかしここで注目しなければならないのは、彼が印刷業を開業し活躍をした土地がクエーカー教徒である William Penn によって植民された土地であるということである。言うまでもなくペンシルヴァニアは、クエーカー教徒が占めており、公定教会も定められてはいない。そのおかげでその他の多くの宗教グループも比較的寛大に迎えられ、ある種様々な宗派の逃げ場のようにもなっていた。またフランクリンは、ビジネスマンそしてジャーナリストの立場から特定の宗派に固執して、

あるいは加担して記事を掲載することを避けるという態度を貫いていた。つまりここでも彼は、宗教との新たな関係を提案していたといえるのではないだろうか。

フランクリンのこの提案は、彼の生み出した印刷出版業界のネットワークにより植民地全土へ伝えられていくことになる。1740年代から1760年代の中央植民地の印刷業者のほとんどがフランクリンの考案した組合契約により誕生している (Amory and Hall, 270-71)。また彼らが使用した印刷出版技術に関連するすべてについてフランクリンの仕方を真似しており、そのおかげでこの時期の印刷出版文化には驚くほどの統一性が見られると言われている。ここで興味深いのはフランクリンが長く交流を続けることになるホイットフィールドが、同時期にフランクリンと同様に従来のピューリタニズム、宗教的ヒエラルキーを覆す契機を作っているということである (増井, 259)。彼もまた植民地各地を巡回伝道することによって覚醒運動の旋風を巻き起こし、彼の推進する宗教のネットワーク化に成功している。それは、増井が指摘しているように「新大陸プロテスタント諸教派の再編を促し、福音主義キリスト教という、まさにアメリカ的な新しいタイプのプロテスタントの登場」(261)につながっていくのだ。

もちろんホイットフィールドのこれらの活躍にフランクリンが一役買っていることも忘れられてはならないだろう。先に述べたようにフランクリンは、新聞記事でホイットフィールドを取り上げており、『自伝』においても数ページを割いて彼について述べている。実際、新聞等の活字媒体の効果は絶大であり、それが大覚醒運動を後押ししたと考えられる。大西が述べているように我々は1740年代の大覚醒運動にメディアが大きく関わったことを見逃してはならないのだ (142)。してみれば、フランクリンとホイットフィールドは、きわめて同時期において互いに相手は無意識に、あるいは意識的に利用しながら自己の目的を果たそうとしていたと考えられる。フランクリンは、印刷出版業と癒着していた神権政治の転覆を図るべく、安価な商品を提供することで神に自身の善行の姿を見せている。またホイットフィールドは、教会などの施設を介しての回心体験とはまったく別の個人による新生体験を強調し、商品を購入することによって信仰復興運動に参加しているとい

う自覚を聴衆に与えることで、既存の宗教的ヒエラルキーを覆そうとしている。二人のエンターテイナーは、つまりフランクリンは、誌面において様々なキャラクターを演じ、ホイットフィールドは、屋外の舞台上で役者のように説教をし、読者を、そして聴衆を既存の宗教の枠組みからそれぞれのネットワークを利用しながら市場あるいは大衆市場の枠組みのなかへ取り込んでいったのである。どちらも新しい宗教的態度の提案であったと言える。

V まとめ

現代においてもアメリカ人にとって宗教は、非常に重要なものであり、アメリカ国民はきわめて信仰心の高い国民とされている。実際アメリカ誌 *Newsweek* が2007年3月30日に発表した世論調査によると、91パーセントが神を信じ、信仰する宗教は全体の82パーセントがキリスト教であるという結果が出ている。アメリカで毎週テレビ放送されている Lakewood Church の牧師 Joel Osteen の説教に熱狂する人々を思い浮かべればこの数字は別段驚くべきことではないだろう。非常に興味深いことは、Samuel Huntington が指摘しているように、宗教への関心のレベルは一般に経済が発展するにつれて減少するものであるとされているにもかかわらず、アメリカは明らかな例外国となっていることだ (ハンチントン, 128-35)。これこそがアメリカがアメリカたる所以かもしれない。科学技術の発展を歓迎し、強い未来志向でありながら、そこには必ず神の姿がある。そもそも彼らの先祖は、聖書に基づく理想的な国家を築くため、多くの危険を乗り越えて、はるか遠く海を渡ってきた神に選ばれた民なのである。この歴史的共通認識は、明らかにアメリカ人のナショナルアイデンティティを作り上げているといえる。

この事情はフランクリンの頃から変わってはいないのだ。Wood は、フランクリンが十九世紀中葉のアメリカ人にとっての英雄となるには、彼は敬虔なキリスト教信者でなければならなかったと指摘しているが (240)、フランクリンは単なる一信者ではなく、もはやキリスト教の教えを広く普及した伝道師とも言えるのではないだろうか。『自伝』に組み入れた新生告白は、明らかに伝統的ピューリタンを含め、敬虔なプロテスタントの信者も比較的抵抗な

くフランクリンの教え，Henry May が穩健的啓蒙主義と呼ぶものを受け入れることを可能にしている。そして印刷出版業のプロとして，印刷出版界を再構築することによって，一気に印刷出版界のネットワークのみならず情報通信ネットワークを広げ，結果的に『自伝』，つまり彼の理想とする教義の普及に成功している。それは植民地におけるアメリカン・コミュニティの意識の誕生の時期とも見事に重なっているのである。

ピューリタニズムの衰退，および変容の只中において，印刷出版界の再構築は，情報および知識のネットワーク化を加速した。そしてそれはフランクリンのようなナチュラル・フィロソファーによって新大陸に紹介された穩健的啓蒙主義思想の知識の枠組みを強固なものにし，そのなかでフランクリンやホイットフィールドが全く別のアプローチでもって，アメリカ的なプロテスタント主義への収束を行っていたのである。してみれば，科学，当時のナチュラル・フィロソフィーの受容と熱心な信仰心が，独立へ向けてひた走っていた植民地の車の両輪となっていたといえるだろう。そしてナチュラル・フィロソファーと宗教家の両方の側面を併せ持つフランクリンは，まさにその時代，社会そのものを体現しているのであり，フランクリンの宗教家としての側面も建国の父祖，そしてすべてのヤンキーの父と呼ばれたフランクリンにとっては，科学者としての要素同様欠くことができない要素として捉えるべきなのではないだろうか。

* 本稿は，日本アメリカ文学会第46回全国大会（2007年10月13日 広島経済大学）における口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。

注

- 1 Walters は *Benjamin Franklin and His Gods* の chapter 6 において，フランクリンの各宗派に対する寛容さを指摘し，それこそが彼の宗教観の重要な土台となっていることを明らかにすべく分析している。
- 2 Franklin は，1728年に書いた墓碑銘のなかで自身の肉体を本に喩えている。

引用文献

- Adams, John. "John Adams on Franklin," J.A.Leo Lemay and P.M.Zall Eds. *Benjamin Franklin's Autobiography*. New York: Norton, 1986.
- Amory, Hugh. and David D. Hall Eds. *A History of the Book in America*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Braiker, Brian. "God's Numbers." *Newsweek*. March 2007 <[Http://msnbc.msn.com/id/17879317/site/newsweek/](http://msnbc.msn.com/id/17879317/site/newsweek/)>
- Breitenbach, William. "Religious Affections and Religious Affection: Antinomianism and Hypocrisy in the Writing of Edwards and Franklin," Eds. Barbara B. Oberg and Harry S. Staut. *Benjamin Franklin, Jonathan Edwards, and the Representation of American Culture*. New York: Oxford UP, 1993.
- Franklin, Benjamin. *Benjamin Franklin: Writings*. J.A.Leo Lemay Eds. New York: Library of America, 1987.
- Lambert, Frank. *Pedlar in Divinity: George Whitefield and the Transatlantic Revivals, 1737 - 1770*. New Jersey: Princeton UP, 1994.
- Mather, Cotton. *Bonifacius: An Essay Upon the Good That Is to Be Devised and Designed*. United States: Kessinger Publishing.
- May, Henry F. *The Enlightenment in America*. Oxford: Oxford UP, 1979.
- Oberg, Barbara B. and Harry S. Staut Eds. *Benjamin Franklin, Jonathan Edwards, and the Representation of American Culture*. New York: Oxford UP, 1993.
- Staut, Harry S. *The Divine Dramatist: George Whitefield and the Rise of Modern Evangelicalism*. Michigan: Wm B. Eerdmans Publishing Co., 1991.
- Walters, Kerry S. *Benjamin Franklin and His Gods*. Urbana: University of Illinois P, 1999.
- Whitefield, George. *George Whitefield's Journals*. Pennsylvania: Banner of Truth trust, 1998.
- Wood, Gordon S. *The Americanization of Benjamin Franklin*. New York: Penguin Books, 2004.

- ハンチントン, サミュエル. 『分断されるアメリカ』
鈴木主税訳 集英社, 2004年
- 増井志津代 『植民地時代アメリカの宗教思想—ピュー
リタニズムと大西洋世界』上智大学出版, 2006
年
- 大西直樹 『ニューイングランドの宗教と社会』彩
流社, 1997年
- 竹腰佳誉子 「植民地における二つの大革命—フラ
ンクリンと印刷業」『中部英文学』第24号, 2005
年

(2009年5月18日受付)

(2009年7月15日受理)

